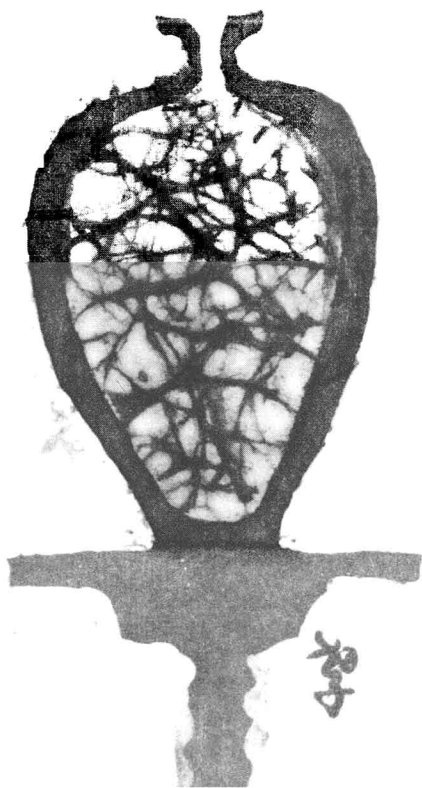




五 條 坂

澤 野 久 雄



新 潮 社 版

五條坂

昭和三十五年五月二十一日 印刷
昭和三十五年五月二十五日 発行

定価 三〇〇円

著者 澤野久雄

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京代表 〇七一一一 九番
振替 東京 八〇八番

(乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。)

印刷・塚田印刷株式会社 製本・神田加藤製本所

© Printed in Japan

目次

五條坂

五

風の跡

五

黒衣

二七

蝶

一六七

昆虫屋敷

二七

あとがき

三〇三

装
幀

木

村

孝

五
條
坂

五
條
坂

祇園石段下から東山線を南に下ると、安井、清水道をぬけて、五条坂に出る。左に折れれば清水寺に登る坂道だが、右手は広い五条通りである。改修された大通りの中央に、柳の並木がふたすじ、その両側にはそれぞれ車道があり、歩道があり、——けれどもその拡がりとは、道というよりも閑かな空地という印象が強い。

数町先を鴨川が横切っている。五条大橋は工事中である。車は余りこの道に入って来ない。人通りも平常は少い。並木の下には、夏じゅう雑草が生い茂った。秋にはその葉末を渡る風が、さやさやと野の声を立てるであらう。

辺りは焼物の町である。道の北側は、軒並に陶磁器商。そして向い側は工場地帯だ。十基ほどあるのぼり窯は、それぞれ月に何回かずつ煙をあげ、松薪の煤を降らす。そうすることによって、何百世帯かの生活が支えられている。

京都では、歴史のある町だ。けれども多くののぼり窯は、磁器を焼くべき一の間、二の間

を、このごろでは電気の碍子などで埋める。古く美しいものは忘れて、実用的な製品ばかりが氾濫する時代である。清水焼は、生地土の値段が、陶器のその倍以上もするし、職人の手間も高くつく。製品の単価は、次第につり上げられた。すると当然、需給のバランスが壊れる。生産を手控える傾向は、いつからか決定的になった。もはや、一時的な現象ではない。

清井三郎治は、清水焼では古い家柄である。東山線の東と西に、住いと工房とを別々に持つて、日展では幾度か特選をかちえた。審査員にもなった。娘の千穂が十五歳の時には、芸大出の修二を養子に迎えた。将来この二人を結びつけさえすれば、家に関する心配はない。いつかわが身が芸術院に列するようなことがあれば、笑って目をつぶれるという腹である。だから彼の窯からも、もう、清楚な清水焼が生れることはない。作品は新しくなった。五十代のなかばに達して、果して、心の底からそういう作品に惹かれているかどうかは疑わしいが、形も色も、年ごとにモダンな傾向を示している。四耕会や走泥社の新しさには及びもつかないが、清水の伝統は、今日の彼の作品からは、影も窺うことは出来ない。

「磁器はもう、お焼きにならへんの？」

千穂は、何気ない口調で訊いて見たことがある。もう二年も前になるだろうか。

秋であった。千穂は駒下駄をつっかけて、母家の縁に腰を下していた。縁には、窯から出して来たばかりの壺が二つ、妙に不安定な形を晒していた。赤や緑の、色のきつい肌に、釉

葉の光沢がふとなまなましい。

縁先から池や植込みのある広い庭を隔てて、茶室風の離れがある。その背は山になっていて、木立は色づき始めていた。木の間から見える鳥辺山の墓地の辺りに、夕陽の色が、投げつけられた油絵具のように朱い。^{あか}

「うむ。やはり新しさが無いと。展覧会に出してもひき立たぬし……。」

軀も大きいから、声も野太かった。が、一向に実の入らない言い方なので、

「清水焼の古きなんて、もう受け入れられる余地もありませんの？」

「うむ、古い。ああいうものの時代ではなくなった。」

子供のころ、その磁器の肌のように美しくなれと、祖母に言われたことのあるのを思い泛べながら、

「むかし、お父様の作らはったもの、思い出しても身がひき締るよう……。」

「減んだものは、なつかしいものだ。」

「減んだもの……?」

千穂は眼に見えぬ冷い手で、不意に肩先を掴まれたようだ。夕陽に投げていた眼を、静かに返した。父はうすべりを敷いた縁側に立膝をして、自分の作品に見入っている。壺に惹かれていたというよりも、計算をしている人の眼である。仕事の喜びよりは、世評を気にしている人の眼だ。

父のうしろには、座敷の一部に高い床を張って、何十という壺や鉢が、もう暮れかけた光の中に沈んでいた。どれも十年來の、父の作品である。

「清水焼って……もうほろびたんですの？」

「うむ。」

千穂の言葉は、果してどこまで父の耳に届いていたか、その額には、彼女の言葉に反応を示す翳は、僅かにも見出せなかった。

——そう？ それではうちも、新しい生き方をせんらん……。

密かに、そう思った。十八歳の時のことだ。千穂が修二を見る眼が、少しずつ変わって来たのは、その日のことがあったからだ。勿論、父は彼女の変化には気がつかない。

修二が養子に来る時、千穂はたしかに一度、父母から相談をうけた記憶がある。いや、相談というよりは、報告といった方がいいかもしれない。千穂は一人娘で、女だから、体力の要る父の仕事は継げない。何代かつづいて来た陶工の家に、その仕事を継ぐ人を求めるのは当然だった。新しく現れる人が、自分の将来を縛るだろうなどは、その時は夢にも思わなかった。けれども年月の経つにつれて、彼女は漠然と父母の意志を感じ取るようになった。すると修二に対して、逆に扉をとざしたのである。あたしは知らない。あたしの知らない間に、あたしに関して何ごとかが決まっているということは、どうしても承知することが出来ない。

けれども、清水焼は滅んだと聞いた時から、千穂の中には修二に対する奇妙な感情が流れ始めた。それは一種の憐憫に似ていた。娘ごろの優しさでもあったらうか。こんな家に養子に来て、一体、修二は何を継ぐというのか。ほろんだ伝統を、継ぐわけにはゆかない。すると、残されているのは、陶工という家業ばかりだ。父の仕事は、父なりに新しいのだから。けれどもあとを継ぐほどに完成されたものではない。修二は父の名に災されず、自分の道を行ったらどうなのか。

千穂はある日、工房の轆轤の前に坐っている修二を見た。

「何を作ってはるね。」

「……。」

修二は一瞬、眼だけをこちらに走らせて、微笑した。

「毎日、こんな所に坐ったはって、しんき臭いことあらへんの？」

「いや……。」

と、修二は言った。

千穂が急に、身に近く思われたのかもしれない。この家に来て三年になる。少女期から女に移り変ってゆく千穂を、彼は充分に観察していたのだろうか。

修二は、轆轤をまわす手を止めた。眼をあげると、窓を見た。狭い空地をへだてて、隣の工場の建物だった。碍子や安手の皿、小鉢ばかり作っている工場である。二十歳ぐらいまで

の女の子が、肩を並べて作業をしている。その少女たちも、傍に立っている千穂も、同じ年頃だ。ふと、珍しい言葉が、彼の口をすべって出た。

「千穂さんも、大人になったなあ。」

あッ、と、千穂は眼を瞠った。呼吸が荒立つようだった。

「いやらし！」

と言った時は、蒼ざめていた。

修二の気持に、近寄りすぎたのだろうか。自分の言葉が、優しすぎたのだろうか。誤解を招いてはいけないと、忽ち立ち直った積りだったが、二、三日すると、父から改めて修二の話が持ち出された。夜の茶の間のひとときであった。

「お前……そろそろ身を固めてもいいことないか。」

「やめて、お父さん。」

「なぜ？」

「こんな形で結婚するの、古いでしょ。」

母は愕いた眼になった。それから肩を落して、息をついた。何十年、父の言いなりになって来た人だ。千穂は母を黙殺して、暗い奥座敷に飾られている磁器の数々を、眼に描いた。

先代三郎治の作品である。仁清から伝わる流れの末だ。美しい石の肌は、いつも見えない風に洗われてでもいるように、冴え返っていた。冷い色調の底に、熱いものが人知れずひそん

でいるようであつた。それを父は、減んだと言つた。結婚だけが古めかしい風習を、受けつぐことはない。

翌日、千穂は、知人の間を駆けまわつた。夜おそく帰つて来ると、白い額をすっきりとあげて、茶の間に入つた。火鉢をはさんで坐っている父母の顔を見比べながら、

「明日からあたし、ファッション・モデルになります。」

立つたままで、そう言つた。

「なんだ、突然……。何も急にそんなことを思い立たないでも……。」

その父の言葉に、モデルという職業に対する一種の輕蔑が、含まれていなかったとは言えない。それと確かに汲みとつたのは、千穂の中にも似たような思いがあつたからだろうか。モデルになる積りなら、もっと早くからなれたのである。

京都の娘らしく、少女時代から踊りも習つた。琴も覺えた。茶の湯はどこの席に出されても、怯えることはない。そしてある時期には、京都で一番有名なデザイナーの経営する、洋裁学校にも通つて見た。校内のショオがあつた時、モデルに選ばれたことがある。

デザイナーの野方良子は、千穂の洋裁に関する才能だけは、最後まで認めなかつた。が、モデルとしての魅力には、一度で惚れこんだものだ。踊りで身につけたものの効果が、不意に現れたのかもしれない。動きは柔かつたし、ポーズをつけると体の線が、描いたように美しく決つた。

「あたしの作る服、着てくれはらへん？」

野方良子のデザインするものを着て、舞台に立つてくれるなら、——つまり専属のモデルになってくれるなら、いくらでも援助しようという。しかし、千穂は二の足を踏んだ。新しい職業に対する、漠然とした反感が、——気羞かしさが、あった。清井家の古い空気を、肌に沁みこませていたのかもしれない。

けれども修二との問題が、不意に目の前に拡げられて見ると、すぐに役立つ才能に頼るより仕方がなかった。

「お目ざわりなら、家を出ます。」

この言葉は、たしかに鋭すぎた。今までに、こんな言い方をしたことはない。が、そのはげしさが、事態を落着かせたのだろうか。父母の眼が、危険なものを見るように、娘を探った。そして当分は、するままにさせて置こうということになったらしい。ところが働き出すと、仕事は殺到して来たのである。二年経った今日、京阪地方の女達の間で、彼女の名を知らないものはない。

2

五条坂では毎年、賑かに陶器祭が開かれる。八月の八日から三日間。昔は、清水焼の端物ばかりを投売りした市だそうだが、今では全国から、何百人という商人が集る。伊万里もあ